

# 造形表現を中心にしたイメージワークにおける 参加者の心的変容と自他発見

## Mental Transformations and Awareness of Oneself and Others in Image Work Focused on Creative Expression

林 牧子\* Makiko Hayashi, 高橋敏之\*\* Toshiyuki Takahashi

【要旨】 本論は、造形表現を主としたイメージワークが、参加者におよぼす心的変容とその要因を明らかにすることを目的とする。イメージワークは、個人ワークとグループワークの2種類の方法と、コラージュ、フィンガーペインティング、カッティングの3種類の内容から成る。各方法と内容の違いにより、参加者の思いや気づきに生じる差異について、自由記述を元にSCATの技法により分析を行い、(1)個人ワークにおける心的変容、(2)グループワークにおける心的変容、(3)フィンガーペインティングからカッティングにかけての心的変容について、3つのモデル図を作成した。そこから、不安や拒否などの否定的感情が生じつつも、ワークを重ねることで、自己肯定感や他者信頼感などの肯定的な感情が生起することと、参加者相互の共通体験がその要因であることが明らかになった。

【Abstract】 This paper aims to show how image work focused on creative expression can bring about mental transformations in participants and factors related to this. Image work is comprised of 2 methods, which are individual work and group work, and 3 types of content, which are collage, finger painting, and cutting. Using the SCAT technique based on free descriptions, we analyzed the variances in participants' thoughts and awareness depending on the different content and methods. We then created 3 model graphs of the (1) mental transformations in individual work, (2) mental transformations in group work, and (3) mental transformations from finger painting to cutting. These showed that, although negative emotions of fear/anxiety and refusal arose, positive emotions such as self-affirmation and trust in others arose through the work, and one of the factors for this was a common experience among participants.

【キーワード】 イメージワーク、造形表現、心的変容、自他発見、SCAT

【所 属】 \*愛知教育大学教育学部 (Aichi University of Education Department of Education), \*\*岡山大学大学院教育学研究科 (Okayama University Graduate School of Education Master's Program)

【受理日】 2014年12月13日

### 1 問題

本論では、造形表現を主としたイメージワークにおける、参加者の自他発見や気づきの過程を分析し、参加者におよぼす心的変容とその要因について明らかにする。イメージワークとは、樋口和彦(1975)によって提唱された「ファンタジーグループ」という、ユング心理学の理論に基づくグループ心理療法<sup>1</sup>を、第一著者がアレンジしたものである。ファンタジーグループは、グループワークを主とし、「グループでの『創造活動(遊び)』を通して、日常生活ではほとんど表に現れることのない無意識からのメッセージ、情動の働きを自分の身体を通して表現し、それを意識化し、より深く自己発見できるようにする」<sup>2</sup>ことを目的としている。

イメージワークは、個人コラージュ、集団コラージュ、個人フィンガーペインティング、集団フィンガーペインティング、集団カッティングという、造形表現を生み出

す5種類のワークで構成されている。集団カッティングとは、直前に実施された集団フィンガーペインティングの作品を、はさみなどで切り、別の用紙に張り付けて再構成する作業である。そのため、集団フィンガーペインティングと集団カッティングは、内容の差異はあるが、ワークとして連続したものである。

コラージュおよびフィンガーペインティングは、心理療法や芸術療法の一つとして、その効果について分析、検討されてきた。コラージュが心理療法の一つとして位置付いたのは、1989年であった(森谷・杉浦ら1993)<sup>3</sup>が、中村(1999)は、コラージュについて、「切断～構成～貼付」という「各作業段階を経過していくことで、内界に喚起したイメージや自己表現内容を自分自身で確認や修正をする体験過程」としている<sup>4</sup>。杉浦ら(1997)は、コラージュ制作者が、イメージを媒介として自己理解と他者理解を行っていることを明らかにしたが、そのためには、「思考過程よりも内的で主観的な感情過程を展開

させること」が要求され、その結果、「自己開発に効果的に働いた」<sup>5</sup>と述べている。つまり、自己のイメージを表出すると共に、他者のイメージを知るという自発的な行為を通して、「自我の変容と拡大がより感覚的・身体的に経験できる」<sup>6</sup>のである。

岡本（2005）は、グループフィンガーペインティングという「自己の内的世界の表現」を通して、「それまで気づかなかった自己の新たな側面との出会いを可能とする」<sup>7</sup>と述べている。さらに、教育現場においても、心の変化を実感し、自他の再発見を促すものとして、コラージュおよびフィンガーペインティングの教育的意義が明らかにされている<sup>8,9</sup>。しかし人は、具体的経験により心的刺激を受けると、それに対する反応として心的な変化を得る。つまり、イメージワークを経験したことにより、何らかの感情を示すことは当然である。したがって、参加者に心的な変化がもたらされたという事実が明らかにされても、それがそのままイメージワークの効果や意義を直接的に説明するものとは限らない。そのため、ワークの経験と共に、参加者にどのような心的変容が起こったのか、その過程を詳細に分析することで、変容の要因を明らかにする必要がある。

また、コラージュ、フィンガーペインティングそれぞれについては、芸術療法と教育の分野から、その効果と意義についての研究及び報告はあるが、これらの体験を一定期間内に連続して実施し、その具体的な経験内容と心的変容について検討した研究は見当たらない。さらに、カッティングの意義については森田（2008）に記されている<sup>10</sup>が、その教育的、また臨床的意味を深化させる必要がある。

そこで本論では、イメージワークを行う中で、参加者

は各ワークの何をきっかけとして心的変容を得るのか、また、どのような感情経験が心的変容の要因なのか、参加者自身のワーク終了後の自由記述を元に、質的分析を行うことで、イメージワークが参加者におよぼす、具体的な影響を考察する。

## 2 方法

### 2-1 参加者および実施時期

男性1名（20代）、女性3名（20代2名、40代1名）の計4名。なお、分析対象者は、20代男性1名（A、保育士）、20代女性1名（B、臨床心理学専攻大学院生）とする。2名には、自由記述と作品写真の使用に関して承諾を得ている。実施時期は201X年2月中、90分×3日と180分×1日の延べ4日であり、参加者は全員、全てのワークを連続して実施している。

### 2-2 手順と内容、および材料

手順と内容、および材料は表1の通りである。グループワークの際に、作品の主題や方向性を決めないことのみを制約とし、自由に、好きなように、好きなだけ実施することを教示した。各ワークは約90分であり、終了後に、感想などを話す時間が設けられた。

### 2-3 分析方法

参加者が、イメージワークから何を感じ、何に気づいているのかについて、自由記述から質的に分析検討するために、大谷（2008）が開発したSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いた。この手法は、「一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの、比較的小

表1：イメージワークの手順および材料

実施順	ワーク名	内容	材料
1	コラージュ（個人）	90 cm × 180 cm の作業台の長辺に2名ずつ座り、着座のまま行われた。各々1枚ずつ作成した。	様々な分野の雑誌（服飾、建築、車、飲食関係など）、コラージュ用の用紙（B5からA3まで各規格の白色用紙）、のり、はさみ
2	コラージュ（集団）	作業台の長辺に2名ずつ座り、着座で行われた。A3用紙4枚を貼り合わせて台紙としたが、この大きさはその場の合意で決定した。	
3	フィンガーペインティング（個人）	作業台の長辺に2名ずつ座り、着座で行われた。各々複数枚作成した。	サクラゆびえのぐ（サクラクレパス社）6色（赤、青、緑、黄色、白、うす橙）、梅鉢、水を入れた器、タオル、フィンガーペインティング用の用紙（個人ワーク用にはB5からA3まで各規格の白色用紙、グループワーク用には90 cm × 120 cm の白色画用紙）
4	フィンガーペインティング（集団）	作業台の長辺に2名ずつ座ったが、作業の進展とともに場所の移動が見られた。90 cm × 120 cm の白色画用紙を用紙とした。途中、用紙を回転させるなどの行為も見られた。	
5	カッティング	（4）の作品をはさみなどで切り、台紙のにりで貼って、新たな作品を創り出した。	はさみ、のり、90 cm × 90 cm の台紙用白色画用紙
6	振り返り	全ワークを振り返り、ワークの実施順に、考えたことや感じたことを、自分の気持ちに忠実に記述するよう教示した。記述時間に制限は設けていない。	自由記述用のワークシート（A4サイズ4枚）

規模の質的データの分析にも有効」である。大谷によると、SCATとは、「言語記録を深く読み込んで潜在的な意味を見出し、それを表すような新たな概念を案出して『新しいコトバ』としての構成概念（construct）を作っていく作業」である。そして、構成概念を「意味のつながりをもたせて、一筆書きのように一筋に」つないで「ストーリーライン」を作るのだが、それらを断片化して「理論記述」を行い、「このデータから言えること」を示すというのがSCATの概要である<sup>11</sup>。

対象者A、Bの2名によって書かれた自由記述からストーリーラインを記し、それを断片化することによって導き出した理論記述をもとにして、イメージワークを経験することにより生起する、感情状態のモデル図を示し、心的変容の過程とその要因を検討する。

### 3 結果および考察

対象者A、Bの記述内容をSCATの方略に則って、内容毎に切片化したところ、Aの切片数が21、Bの切片数が27となった。そして、それぞれの各切片から構成概念を導き出し、ストーリーラインを記したものを表2、表3に示す。なお、表中の下線は構成概念を表す。また、本文中の【 】は、対象者による自由記述内容を示している。

イメージワークは、個人と集団という、実施方法の違いと、コラージュ、フィンガーペインティング、カッティングという、内容の違いに二分されるため、心的変容の差異を、方法と内容についてそれぞれ明らかにする必要がある。そこで、A、Bのストーリーラインから導き出した理論記述をもとに、ワーク方法の違いによる心的変容の差異について、モデル図を示した（図5、図8参照）。

また、ワーク内容の違いによる心的変容の差異を検討するために、コラージュ、フィンガーペインティング、カッティングそれぞれについてモデル化を試みたが、コラージュとフィンガーペインティングは、個人と集団という方法の差についての記述が主であり、コラージュ、およびフィンガーペインティングについては、それぞれのワークを独立させてモデル化することはできなかった。しかし、集団カッティングは、集団フィンガーペインティングの作品を再構成しているため、ワークの連続性に関する記述がみられた。そこで、これらの記述をひとまとまりとし、集団フィンガーペインティングと集団カッティングを合わせてモデル化を行った（図10参照）。

なお、図5・8・10中に記されている、生起する気持ちとは、ワーク実施中の感情体験について、また気づきとは、参加者がワークを終えて気づいたり発見したりした内容について、対象者A、Bの理論記述から抜粋したものである。

表2：A（20代男性、保育士）の各ワークにおけるストーリーライン

A-1： コラージュ （個人）	個人コラージュでは、 <u>自分のイメージを外在化するための素材探しとそれを形にするための工夫に夢中になった</u> 。個人コラージュは <u>イメージが意識化されるがゆえに、目的的になる</u> 。また、 <u>心理状態が表面化するために自分の状態が反映される</u> 。
A-2： コラージュ （集団）	グループコラージュでは、 <u>イメージが不確定なので目的遂行よりも活動を楽しむことが目的となる</u> 。イメージの不確定さからくる <u>あいまい性ゆえの、他者に対する非尊重的態度もみられたが、これはお互いの信頼感と自由度の高さからくるものだ</u> 。相談はなくても <u>他者理解が行われ、非言語的な共感的応答がみられる</u> 。そのために <u>他者の意図の排斥と尊重が混在（併存）しており、これはイメージがあいまいであるからこそその自由な志向性と言える</u> 。
A-3： フィンガーペインティング （個人）	個人フィンガーでは <u>完成形が明確化されていたので目的志向性を促す</u> 。夢中で描いていると他者へ目がいけないが、これは <u>自分の満足感の後に他者志向性がうまれるということだろう</u> 。つまり、 <u>自分の満足が他者受容より優先事項となるのだ</u> 。
A-4： フィンガーペインティング （集団）	グループフィンガーは完成形がイメージできない。目的のない活動は活動そのものに意識がいくが、活動が飽和状態になると、 <u>具体的なイメージを求めようとするものだ</u> 。途中でを行った場所移動がお互いの境界・領域を破壊し、 <u>自己＝他者というカオスを生み出した</u> 。しかし、 <u>終わりを意識し始めると、活動そのものを楽しんでいたメンバーも、作品としてまとめようとする意識が働く</u> ようだ。
A-5： カッティング （集団）	カッティング自体に、破壊と再生への期待をもった。このワークは輪廻転生と人間の発達過程の象徴と感じられた。 <u>作って壊して作り直す行為は、生と死と再生をイメージさせる</u> 。これはいのちの営みとその連続性を表す。
A-6： 総括	個人コラージュでは自分の心の中を出し切ったカタルシスによって充実感を覚え、その後の読み取りで客観化を図れたことは、 <u>主観的・感覚的な部分と客観的・理性的な部分が連動したと言える</u> 。それと比較して、グループワークは <u>安心感と信頼感と居場所感、そして自由さを感じられる他者があり、それに伴う心地よさがあった</u> 。そのためか気持ちの動きが豊かで <u>ダイナミックなものとなった</u> 。ただ、 <u>個々の心理的領域については保持と尊重を忘れず、他者の表現や思いに対する共感を用いて応答性の高いやりとりとなった</u> 。そこからくるつながり感により、満足感を覚えた。これは明確な言語化が無いからこそその自由さであり、 <u>信頼感に支えられたあいまいさが生む心地よさと気持ちの豊かさだろう</u> 。他者と自分の個性をそれぞれ尊重することで発生する理性的な融合は、 <u>無意識と意識が共存して起こる</u> 。このワークプロセスは <u>大人と子どもでどう違うのだろうか</u> 。



表3：B（20代女性，臨床心理学専攻大学院生）の各ワークにおけるストーリーライン

B-1： コラージュ （個人）	自分にとって期待度の高いコラージュを行いながら、自分らしさを探索しつつそれを明確にしていた。しかしイメージが違うことで欲求不満になり、モチベーションが低下し、面倒に思うが、それを許さない自分との間で葛藤する。自分が明確になることに対して恐れを抱き、防衛的になったのだが、それが最終的な妥協、および固執と放棄の同時的生起の原因かもしれない。そしてこのことをきっかけとしてH氏は自己を客観的に理解し、「いつもの自分」に気付く。結果的にこれでよかったと合理化を行った。
B-2： コラージュ （集団）	自分の場所がある安心から自信をもって挑戦的行動に出たが、いつのまにか自分の場所が浸食され、焦燥感と不安を感じるとともに、土足で侵入されることへの拒否感が出てきた。しかし肯定へと思考的転換を行い、拒否的な思いを反省すると視界が開けたが、ここで自らに起こった心理的变化に驚いた。個性と個性の出会いによって新たな個性が誕生することとグループの力に驚いたが、グループワークはコンプレックスが表面化するために楽しさと厳しさの両義性を感じた。
B-3： フィンガーペインティング （個人）	不可避である苦手な事態に対して心的安全を保障しようとしたのだが、描画表現が成功したことに対する意外性と自ら生み出すことへの充実感を味わった。しかし、的確に、焦点化からのズームアウトができた自己の持つ冷静さに満足した。
B-4： フィンガーペインティング （集団）	これまでの経験の蓄積によりわくわく感を抱いていたが、期待と現実のギャップを感じる。しかし諦念と正当化をすることで楽しくなり、心身ともに自由さを感じた。これは、模倣できることへの安心感によるもので、模倣により他者と接近できることで親密度が増加すると思った。終わりに近づき、狭い視点からは違和感を感じたが、俯瞰したときに感動を覚え、他者受容できた。
B-5： カッティング （集団）	作品を気に入っていたので破壊は寂しく感じ、作品を保持したいと思った。だがワークの意図を理解して破壊行為を受容する。この段階まで来て、居場所があるからこそ自己肯定感が生まれるということ、そして他者から受容されることで安心感が出ることに気付く。そして、作品もメンバーの思いも抱擁するかのようには受容することができた。信頼感と居場所感からくる安心および安定が、ネガティブな感情から解放してくれたのだろう。
B-6： 総括	ワークの意義を明確にできた。造形表現が無意識を表面化させることに驚き、同時に無意識にとっている態度を前意識に持っていった意識化できた。自分は心理的安全を保障するためにあいまいさを選択していたが、これは防衛なのだろう。ただ、メンバーの作品を見て、個性を尊重できたし、造形表現はとてもアサーティブなものだと面白く感じた。また、グループワークは現実とリンクしており、自己のネガティブな部分にも気付いたが、それを受容してくれることに感謝し、それが不安感を安心に変えてくれたのだと客観視している。グループワークにおいて、とても良い感、ここにいる感を覚え、周囲への感謝を感じると同時に「そういえば私って」と自己のパターンを再認識した。将来を見通したら、この経験を通して感じた自己への気付き・再確認（諦念）・認め体験作業が意味あるものだと感じた。

### 3-1 個人ワークにおける心的変容

対象者は、自分らしさを探索するという目的をもってワークを開始するが、様々な肯定的及び否定的感情経験を経て、新たな気づきや自己肯定感がもたらされることが明らかになった。しかし、その感情経験内容は、対象

者の対人態度、ワークへの積極性、造形表現に対する苦手意識の有無により異なることも示唆された。

Aは、【自分の心の中にあるものを表現した】【作品を完成させたことへの満足感があった】と記述しており、自己表現に対して夢中になり、没頭していたことが分かる。そして、フィンガーペインティングにおいて、【2枚目は自分の作品に夢中であつたため、他者に目をやることはなかったが、3枚目になると意識的に他者の作品に目を向けた】と記述しており、自分が満足して充実感を得た後に、他者への意識が及ぶということに気づいていた。

一方、Bの記述によると、【自分の感情を他者に表現するのはいつも抵抗を感じていて、家族にも友達にもほとんど見せない】、【無意識のうちに自分の空間を守ろうと防衛してしまっている】とあり、自己開示には消極的で、感情を表現することに抵抗を感じていたようである。完成作品を見て、【防衛的】だと確信し、【自己について考えさせられた】と記述している。しかし、フィンガーペインティング後の記述で、【無から創造することが苦手】としつつも、【今回は目標地点（自分のイメージ通り）よりも上にいけたから満足できた。また、その時の心境を外部にうまく表現できてスッキリした気持ちがあった】と述べている。

このように、対人態度の違いや、ワークに対する積極性や捉え方の差異により、ワーク中の感情状態は固有の



図1：コラージュ  
（個人）Aの作品



図2：フィンガーペイン  
ティング（個人）Aの作品



図3：コラージュ  
（個人）Bの作品



図4：フィンガーペイン  
ティング（個人）Bの作品

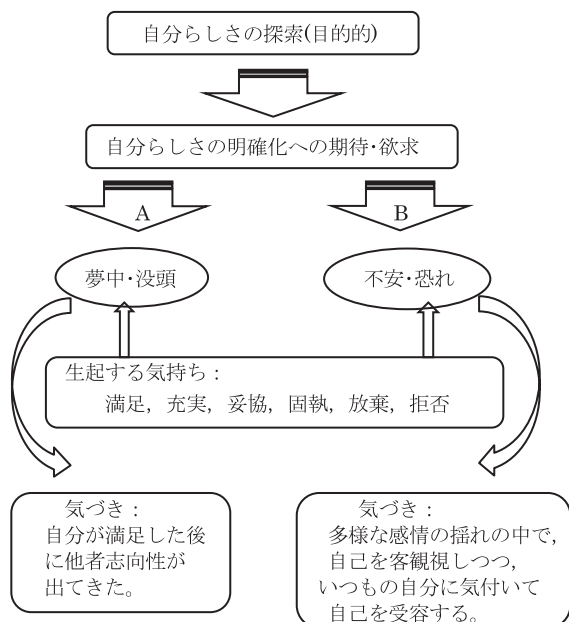


図5：個人ワークモデル図

過程を経るが、内的状態をうまく表出できると、自己満足と自己肯定感を得て、他者への意識にもつながることが明らかになった。つまり、自分が十分満足するまで対象と向き合えたとき、外部へ意識を向ける心理的余裕が生まれるのであろう。

### 3-2 グループワークにおける心的変容

グループワークは、自分の思い通りに実施できないため、自分のイメージの実現よりも、行為自体を楽しむという目的をもってワークを開始するが、そのためには、参加者間で生みだされる、自由で安心できる雰囲気と、参加者自身がその雰囲気を感じるによって覚える、居場所感が重要であるということが明らかになった。

しかし、自由で安心できるために、【他者の思いを排斥】したり、他者の心理的・物理的領域に侵入したりするようになる。この点に関しては、【心地よさ】と、【拒否】及び【あきらめ】という、相反する捉えが確かめられた。グループワークに関しては、他者との親密性を望みながらも、自分の居場所を固持したいという葛藤を持つことがあるということ、しかし、その集団に信頼感や安心感があるならば、最終的に、満足感や自己肯定感を覚えるということが示唆された。

Aは、他者の描画表現の上に重ねる行為について、【他者の意図を無視するような行動】と記している。しかしこれは、否定的な意味合いではなく、【互いの解釈に支えられたあいまいさが人間関係を豊かにすることもある】という捉えが基本となっている。また、あいまいさは【心地よさを生み出し】、【ワークを通して人とのつな



図6：コラージュ（集団）作品

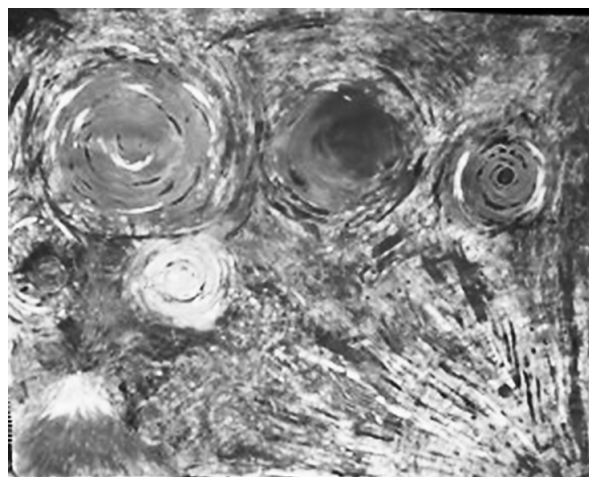


図7：フィンガーペインティング（集団）作品

がりを感じられる経験ができた】とも述べている。グループワークは、完成形のイメージが不確定だからこそ、【活動の志向性はその場で適時的に作り替えられる】という自由度の高さがある。Aが、そこに心地よさを感じたのは、【相手の意図を解釈しようと常に気持ちを動かしていた】という、参加者相互に行われた他者理解および他者受容の態度と、【ワークを介して他者と心のやりとりを行い、作品が完成することによって他者とのつながりが築けた】という【満足感】からくるものであろう。

Bは、用紙全てが自分の場所と理解しつつも、自分の固有の場所に対する思いの強さを持っていた。そのため、他者の表現の広がりに対して、【侵入】【浸食】と捉え、自分の場所があることに対する安心感について言及している。しかし、【心のパーソナルスペースを縮めてくれたのかな】と捉え直すことで意識の変化が起き、それぞれの個性を受容し、それらが混ざり合って新たな個性として作品化されたことに【グループの力】を感じている。Bは、グループワークによって、【初対面の人に距離をとる】という、自身の対人関係の傾向を直視させられ、【厳しい課題をつきつけられる感じ】と述べつつも、そのような自分について、【周りの友達が認めて尊重してくれ

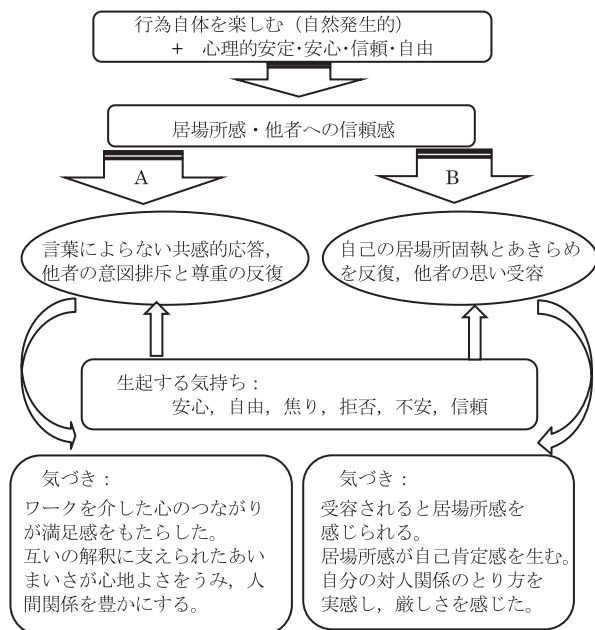


図8：グループワークモデル図



図9：カッティング（集団）作品

て（中略）感謝の気持ちを感じた】と振り返っていた。

本ワークにおけるグループワークは、参加者固有の場を保証する境界線がないため、心理的な安全基地が存在しない。また、紙面全体が全員の場所なので、居場所を守りたいという欲求と、他者と混ざりたいという欲求が葛藤を起すこともある。ワーク中に、自分の描画に他者が重ねることはよく起こるが、重ねる側にも、心配や遠慮、開き直りなどの複雑な心境が交錯するであろうし、重ねられる側にも、拒否やあきらめ、喜びなどの感情が起こるだろう。しかし、これらの相反する感情が同時に生起して、葛藤や迷いを繰り返した末、最終的に自分なりの答えを出すことになる。複数人が一つの紙面で同時に自己表現を行うということは、自己内においても、自他の関係においても、様々な感情が沸き起こるが、集団を構成する仲間に対する信頼感により、自己の性格傾向や、人間関係の取り方について、再確認や新たな発見が促されることが示唆された。

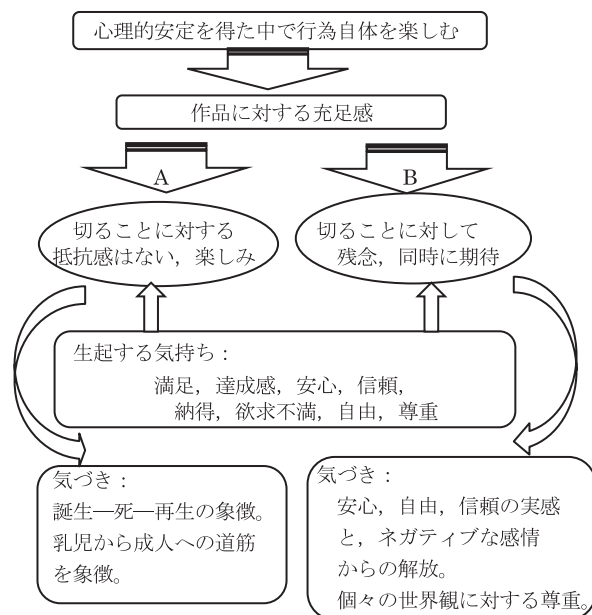


図10：フィンガーペインティング（集団）からカッティング（集団）への流れモデル図

### 3-3 集団フィンガーペインティングから集団カッティングにかけての心的変容

コラージュが、主として既成の図を切り貼りするものであるの対照的に、フィンガーペインティングは、自ら作りだすものであるため、これらのワーク内容に対する参加者の捉えに大きな差異があり、その差異について言及がなされると仮定していたが、それに関する明確な記述は見当たらなかった。しかし、カッティングは、集団フィンガーペインティングで作製したものを切るため、自分たちの作品と、それを切り貼りすることへの思いが関連性をもって書かれていた。集団フィンガーペインティングでは、対象者は、信頼感や安心感だけではなく、拒否感やあきらめなどの感情を味わいつつも、仲間から受容されているという思いによって、ワークに対する満足感や自己肯定感などを感じ取っていた。カッティングは、それらの感情体験を基盤として実施されているため、充足感ゆえ、切ることに抵抗を示さないAと、切ることに抵抗を示すB、という両極端の反応が表れた。

Aは、作品を切ることへの抵抗感もなく、カッティングを楽しんでいたが、これらを一連の流れとして捉え、【誕生—死—再生】と記した。描画や制作を得意としているAは、ワークへの拒否感や苦手意識もなく、様々な素材に臆せずワークに参加していたが、自己の心的変化について深く追究するよりも、ワークの意味や、グループの変化や構造について総合的に捉えていた。

また、最初は【無から創造することが苦手】だと多少の抵抗感を示していたBも、【ちゃんと気持ちも終わり



に向かうプロセスを体験できるという意味でやってよかった(中略)最初からあった「なんでもいいよ」というルール(雰囲気)を心から受け入れることができて、ポジティブな意味で「なんでもいいや」と思ってできた」と記している。自分の心的状態が可視化されるかもしれない不安と、無からの創造に対する苦手意識を持って開始したワークであったが、カッティングにおいては、【ネガティブな感情は全く生まれなかった】、そして、【「こんな自分だけどまあいっか」と思わせてくれた】という記述がみられた。Bにとって、ワークは【ポジティブに思えるものばかりではなかった】が、【自分のことを見直すきっかけにな】り、最終的には、今のまま、ありのままの自己肯定につながった。

以上のように、参加者自身の性格傾向やワークへの積極性によって過程は違うものの、A、B共に、最終的に集団フィンガーペインティングとカッティングに関しては肯定的な捉えをしていた。これは、参加者間で作られた、心理的に安心できる空間によるところが大きい。しかし、林(2009)によると、ワークへの印象は、肯定的なものばかりではない。特に、集団フィンガーペインティングは、他のワークよりも拒否的な反応や否定的な思いが多く見られた。それに対し、集団カッティングは、全ワークの中で最も肯定的に捉えられていた<sup>12</sup>。集団フィンガーペインティングでは、大きく塗り広げるという行為と、自分の場を保持しつつ作り込むという行為は共存しづらい。また、上から塗り重ねると、下の描画は消されるため、塗りたいが、やりにくいという気持ちや、自分の場所に入って欲しくないという思いが生じ、欲求不満や葛藤を覚える。

Aは、【序盤のただ感触を楽しみ、次第に形を意識し始めるさまは、乳児から幼児への移行】で、【他者との色の混ざり合いを楽しみはじめ、全体の色味を見て、自分がどこに何色を塗るかを決めることは、他者とより社会的な関係を築いていく、児童から成人への道筋】と記しているが、全体を見て自分の振る舞いを意識するには、精神的疲労が伴うこともあろう。しかし、仮に、集団フィンガーペインティングに対して否定的な印象を持っていても、カッティングでは、切って別のものに作り替えることができる。しかも、立体的に貼れば、下の切り絵を消さずに済む。つまり、他者の表現を消すことなく、相互に関わることができる。これらの特徴が、対人関係における緊張感を和らげ、集団カッティングに対する肯定的な捉えにつながるのであろう。

本論においては、ワーク内容に対する捉えについて、具体的な言及は見られなかった。しかし、集団フィンガー

ペインティングからカッティングの流れについて、Aは【誕生-死-再生】、Bは【ちゃんと気持ちも終わりに向かうプロセス】と捉えており、切るという行為が、区切りや終わりの意味を持つことが示唆された。

#### 4 総括

コラージュやフィンガーペインティングは、造形作品制作を目的とする造形表現法としても、心理的な治療を目的とする芸術療法としても実施されている表現方法の一種である。しかし本論では、それらをどちらとしての扱いでもない、イメージワークとして包括した上で、一連の造形表現活動を通じた参加者の自己と他者への新たな気づき過程を分析することにより、イメージワークが参加者にもたらす心的変容とその要因について考察した。

分析対象者であるA、Bはそれぞれ、イメージワークに対しては興味や関心を持っていたものの、積極性に差が見られた。それは、本ワークが、造形表現を主として構成されていることに起因している。つまり、イメージワークは造形作品を作るものでも、心理療法でもないとの位置づけであるが、方法が造形表現によるものであるため、対象者が感じる造形技術に対する苦手意識の有無、及び造形表現自体が自己の心理の投影となることに対する不安の強弱が、ワークに参加する際の積極性に与える影響は不可避だと考えられる。

しかし、ワークに対する積極性の強弱と、ワークへの最終的な評価は、必ずしも一致するわけではない。つまり、ワーク開始当初は、積極的に関われず、否定的であっても、参加者への信頼感があると、否定的な感情経験に対しても、肯定的に評価する傾向がうまれると示唆された。これらの気づきと変容は、イメージワークが3種の造形表現を、個人もしくは集団で連続的に実施する構成であるため、各ワークにおける感情体験の比較を容易にしたことに起因する。また、それらの過程を記述によって言語化することにより、自己の感情体験に対する客観化が図られた。

A、Bは共に、イメージワークに対して、最終的に肯定的な思いを記していた。これは、参加者が相互に思いを汲み取り、個人の物理的および心理的な場に踏み込みすぎず、他者の表現を尊重したことにより、その場全体に【心地よさ】が広がったからであろう。参加者同士の関係性や応答性は相互に影響を及ぼし合い、その場の空間の居心地の良さにつながり、それが、Bの捉えに見られるように、否定的な感情が肯定的な感情へ移行する要

因ともなった。また、Bのストーリーライン（表2、B-6総括参照）において言及されているように、造形表現は言語によらない表現方法であるが、造形表現過程における感情経験を言語化することによって、無意識を表面化させる可能性が示唆された。

ただし、この傾向は、参加者が無意識裏にイメージワークの意義を感じようとしていたことも一因であろう。そのため、参加者への信頼感がもたらす自己肯定感の高まりという価値などを導き出したことも想定される。

ワークに対して否定的な思いを持ったままワークを行う者や、ワークの進行とともに積極性を失う者がいるのも事実である<sup>13</sup>。今後は、それらの参加者による自由記述を質的に分析し、否定的な感情状態に至る経緯や要因について、検討する必要がある。そして、ワークに対する否定的な感情が生起する過程を分析し、イメージワーク体験が、個人にもたらす感情経験の全体像を明らかにする。それと共に、コラージュとフィンガーペインティングという、ワーク内容の違いによって生じる気づきの差を考察する。

#### 【註】

- 1 樋口和彦, 2000, 「ファンタジーグループとは」, 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, p. 5
- 2 坂本雅紀, 2000, 「ファンタジーグループの指導 話し合い II」, 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, p. 66

- 3 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 山中康裕 (編), 1993, 『コラージュ療法入門』, 創元社, pp. 198-199
- 4 中村勝治, 1999, 「コラージュ療法の独自性」, 『現代のエスプリコラージュ療法』, 至文堂, pp. 44-50
- 5 杉浦京子, 鈴木康明, 金丸隆太, 1997, 「集団コラージュ制作の効果—社会心理学的, 臨床心理学的考察—」, 日医大基礎科学紀要, 第23号, 日本医科大学, p. 14
- 6 杉浦ら, 前掲書, p. 14
- 7 岡本直子, 2005, 「パーソナリティ傾向と表現体験との関連性についての研究—大学生のグループ・フィンガーペインティングを通して—」, 『沖縄国際大学人間福祉研究』, 第3巻, 第1号, 沖縄国際大学, pp. 55-70
- 8 徳永桂子, 1999, 「連想コラージュ法」, 『現代のエスプリコラージュ療法』, 至文堂, pp. 75-77
- 9 岡田康伸, 萩原孝子, 森田琢美, 今井暁式, 2000, 「ファンタジーグループの利用」, 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, pp. 93-126
- 10 森田琢美, 2007, 「イメージによるグループワークの実際」, 『カッティング』, 至文堂, pp. 138-145
- 11 大谷尚, 2007, 「4ステップコーディングによる質的データ分析方法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』, 第54巻2号, pp. 27-44
- 12 林牧子, 2009, 「イメージワークがもたらす個人内の変容—保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—」, 『愛知教育大学幼児教育研究』, 第14号, 愛知教育大学幼児教育講座, pp. 19-26
- 13 林牧子, 2011, 「イメージワークに伴う個の心理的ダイナミクス—保育者を目指す者の豊かな感性を拓く—」, 『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』, 創刊号, 愛知教育大学, pp. 11-19